

## &lt;研究・実践ノート&gt;

保育士養成課程における学内での演習・実習の試み  
—コロナ禍における保育実習Ⅰ（施設実習）の代替として—  
A Test of On-Campus Exercises / Practical Training in the Childcare  
Worker Training Course: As an Alternative to Childcare Training I  
(Facility Training) during the Coronavirus Crisis

藤原映久 ・ 宮下裕一  
(保育教育学科) (保育学科)

キーワード：学内演習・実習、コロナ禍、保育実習Ⅰ

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、令和 2 年度の保育実習に大きな影響を与えた。保育士養成に課せられる必修科目としての保育実習Ⅰ（厚生労働省，2019）は、保育所における実習だけではない。児童養護施設などの保育所以外の児童福祉施設や障害者が利用する施設での実習（以下、施設実習と記す）がある。施設実習の対象となる実習施設の利用児・者は施設利用の背景・理由や年齢が多様であり、その状況によっては、新型コロナウイルス感染症に感染した場合の深刻な症状が懸念される。特に乳児が利用する乳児院、障害児が利用する児童発達支援センターや障害児入所施設、高齢者や難病罹患者も含む障害のある 18 歳以上の障害者が利用する障害者支援施設や障害福祉サービス事業所などは、利用児・者が新型コロナウイルス感染症に感染した場合のリスクを考えれば、実習生の受け入れ中止も検討せざるをえない。厚生労働省（2020）はこのような状況のなか、新型コロナウイルス感染症の影響のため実習施設の確保が難しく、実習施設の代替が困難である場合は、施設実習に代えた演習又は学内実習等の実施を認めた。

島根県立大学松江キャンパス（以下、本学と記す）では、人間文化学部保育教育学科と短期大学部保育学科において、毎年度、計 70 名程度の保育士を養成しており、施設実習においては、半数を超える学生が乳児院及び障害児・者関係の施設で実習を行っている。このことから、令和 2 年 4 月～5 月にかけて施設実習の実習先施設に対して実習生の受け入れに関する電話調査を行った。その結果、令和 2 年度に施設実習の履修を予定していた 69 名のほとんどについて、確実な実習先の確保ができないことが判明した。その結果、令和 2 年度における本学の施設実習は学内における演習等を行うことになった。このコロナ禍のなか、施設実習における実習先の確保は全国的な問題であると考えられ

るが、新型コロナウイルス感染症の収束は見えていない。感染拡大地域を中心として、今後も施設実習に代わる学内演習等を行わざるをえない保育士養成施設が存在する可能性は高い。そこで、本稿の目的は他の保育士養成施設が参考にできるよう、本学で行った施設実習に代わる学内演習等の試みについて報告することにある。

## 2. 施設実習に代わる学内演習等

### 1) 履修者及び実施期間

#### (1) 履修者

本学人間文化学部保育教育学科 2 年生 27 名と本学短期大学部 2 年生 42 名の計 69 名が履修した。

#### (2) 実施期間

2020 年 8 月 17 (月) ～8 月 21 日 (金) 及び 8 月 24 日 (月) ～28 日 (金) の 10 日間で実施した。

### 2) 新型コロナウイルス感染症対策

履修学生は、朝夕の検温に加えて、倦怠感、咳、呼吸苦、咽頭痛、鼻水等に関して毎日の健康チェックを行い、健康状態に問題がない学生のみが本授業に出席した。本授業に参加する教職員及び学生は、手指の消毒とマスクの着用を徹底した。また、可能な限り 3 密を避けるため、本学で最大の講義室である大講義室 (246 名収容) (図 1) で実施可能な内容に関しては、全て大講義室を使用し、定期的な換気を行った。さらに、体験活動やグループワークなどで学生同士の距離が近くなる場合、学生はゴーグルを着用し、必要に応じて他教室も利用した。



図 1 大講義での本授業の実践風景

### 3) 実践内容

実践内容は、「施設職員による講演」、「支援技術に関する演習」、「体験活動」の 3 分野から構成された。

#### (1) 施設職員による講演

「施設の実際」と称して、乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設、児童心理治療施設、母子生活支援施設、福祉型障害児入所施設、指定発達支援医療機関、児童発達支援センター、障害者支援施設、障害福祉サービス事業所の 10 種類の施設及び事業所から職員を講演者として招き、各講演者は質疑応答を含めて 90 分の講演を行った。

講演者は、各施設や事業所の沿革や特徴、求められる社会的役割、利用児・者の背景、利用児・者の生活（一日の流れ等）、職員に求められる知識や技術、やりがいや勤務の魅力、直面している課題などについて、職業上の体験談を交えながら講演を行った。

## (2) 支援技術に関する演習

子育て支援プログラム演習、対人援助演習、余暇活動演習の3種類の演習を実施した。

子育て支援プログラム演習は、90分×6回で構成され、履修学生はコモンセンス・ペアレンティング（野口，2015）を体験的に学んだ。

対人援助演習では、メンバー相互の理解をテーマとしたワーク（鯖戸，2016）、対人トラブルの多い児童のための SST 用ストーリーカードを用いたソーシャルスキル・トレーニング（藤原，2007）、セカンドステップ（井部，2006）などを利用した社会的情緒的学習について体験的に学んだ。それぞれ、90分×1回であった。

余暇活動演習では、障害児・者の余暇活動について 90分×2回、要保護児童の余暇活動について 90分×2回のグループワークを行った。このグループワークでは、余暇活動の意味と障害児・者及び要保護児童のニーズを吟味したうえで、それぞれのニーズに対応した余暇活動を考えた。

## (3) 体験活動

実習施設を利用する児・者の状態やその活動の理解を促進することを目的として、障害体験、遊び体験、食育体験、作業体験の4種類の体験活動を行った。障害体験は障害のある状態の身体的・心理的な疑似体験を、遊び体験は児童養護施設や児童心理治療施設などにおける児童との遊びを想定しており、作業体験は障害者支援施設や障害福祉サービス事業所で行う作業を想定している。また、食育体験は実習先において、知的障害のある児童とともに行う調理活動を想定している。

障害体験は、身体障害（肢体不自由及び視覚障害）の体験と、発達障害（LD 及び ADHD 等）の体験を実施した。身体障害の体験では、履修学生は記録映像を視聴して、肢体不自由のある障害者と視覚障害のある障害者の実際の生活状況を確認したうえで、車椅子で屋外を移動する体験とアイマスクを装着して歩行する体験をした。体験にあたり、車いすを利用することによる移動困難、またアイマスクによる視覚からの情報が遮断されることによる歩行困難が「恐怖体験」とならないよう事前に説明をし、体験後は、どのような配慮や働きかけがあれば不安や不便さが軽減され、安心感が増すのか等に焦点をあてるまとめを行った。発達障害の体験では、LD・ADHD 等心理的疑似体験プログラム第3版（梅田ら，2016）を用いて、文字を読めない状況、言葉の区切りがわか

らない状況、読んでも理解できない状況、図や文字を正しく写せない状況、読めないために書くのに時間がかかる状況、板書の書き写しが難しい状況における心理的疑似体験を行った。

遊び体験では、3～5 人程度の人数で楽しむことができる卓上ゲームと工作を行った。卓上ゲームでは、幼児から中高生までの幅広い年齢の児童と遊ぶことを想定して、「虹色の蛇」、「ハリガリ」、「ジェンガ」、「ブロックス」、「アンゲーム」の 5 種類を体験した。また、工作では、かざま・えびな（2004）が紹介するものを中心として「牛乳パックを使ったぶんぶんゴマ」、「割りばし鉄砲」、「ポリ袋を使ったパラシュート」、「ストローと厚紙を使った竹とんぼ（ストロートンボ）」、「ペットボトルと割りばしを使った大根弓」、「ツバメヒコーキ」を作製して実際に遊んだ。

食育体験では、まず 5, 6 人のグループを作り、そのメンバーで、知的障害児を想定した調理計画を作成したのち、個々人が自宅で計画に沿って調理を行った。最終日にはグループのメンバーで対象児童にわかりやすい「調理手順」を、パワーポイントを用いて作成し、ポスター発表形式にて発表した。また時間を区切り、学生が他のグループの発表を聞くことができるようにした。

作業体験では牛乳パックから紙すき用のパルプを作り、色や透き込む飾りを工夫してオリジナルハガキ作りを行った。

#### 4) 実践体制

本授業については、「施設職員による講演」を除けば、基本的に施設実習の担当教員である著者ら 2 名が分担して行ったが、作業体験では本学で実習事務を担当する職員 1 名も加わった。

#### 5) 全体の構成

表 1 に施設実習に代わる学内演習等の全体構成を示す。初日の 1 時限のオリエンテーションで本授業の全体像を提示したのち、最初の 5 日間の 1, 2 時限及び 6 日目の 1 時限は「施設職員による講演」を行った。また、最初の 3 日間の 3, 4 時限は、「支援技術に関する演習」の 1 つである「子育て支援プログラム演習」を行い、4 日目、5 日目の 3, 4 時限は「体験活動」の 1 つである「障害体験」を行った。6 日目以降からメンバー相互の理解などの対人援助演習も始まり、後半の 5 日間は、「支援技術に関する演習」と「体験活動」を中心とした。

このように、日程の前半は、実習現場の想像を容易にするため、多様な施設の実態や児童と接するために必要な養育技術を学ぶとともに、障害児・者と接するために必要な障害理解を促進する構成とした。そのうえで、日程の後半は、より多くの幅広い演習と体験活動に臨むことができる構成とした。

## 6) 成績評価

毎回の 5 時限を利用して、履修学生はその日に学んだ内容、活動、体験等を振り返りながら、「大切だと感じた事柄」、「新たな学び」、「今後の課題への気づき」、「感想・質問」の 4 点をレポートにまとめた。本授業への取り組み状況とこのレポートから総合的に成績の評価を行った。

## 7) 欠席者への配慮

本授業は全て録画した。体調不良や本学が認める公欠により欠席した学生に対しては、その録画映像を用いて補講を行った。

表 1 施設実習に代わる学内演習等の全体構成

| 日程          | 1 時限  | 2 時限                    | 3・4 時限                              | 5 時限                   |
|-------------|---|-------------------------|-------------------------------------|------------------------|
| 8/17<br>(月) | オリエンテーション                                     | 施設の実際①<br>・ 乳児院         | 子育て支援プログラム演習①②<br>・ コモンセンス・ペアレンティング | 連絡事項及び振り返り<br>(レポート作成) |
| 8/18<br>(火) | 施設の実際②<br>・ 児童養護施設                            | 施設の実際③<br>・ 障害児入所施設     | 子育て支援プログラム演習③④<br>・ コモンセンス・ペアレンティング |                        |
| 8/19<br>(水) | 施設の実際④<br>・ 児童自立支援施設                          | 施設の実際⑤<br>・ 障害者支援施設     | 子育て支援プログラム演習⑤⑥<br>・ コモンセンス・ペアレンティング |                        |
| 8/20<br>(木) | 施設の実際⑥<br>・ 児童心理治療施設                          | 施設の実際⑦<br>・ 障害福祉サービス事業所 | 障害体験①<br>・ 身体障害(肢体不自由・視覚障害)         |                        |
| 8/21<br>(金) | 施設の実際⑧<br>・ 指定発達支援医療機関                        | 施設の実際⑨<br>・ 児童発達支援センター  | 障害体験②<br>・ 発達障害(LD・ADHD等)           |                        |
| 8/24<br>(月) | 施設の実際⑩<br>・ 母子生活支援施設                          | 対人援助演習①<br>・ メンバー相互の理解  | 食育体験①<br>・ 調理計画の作成                  |                        |
| 8/25<br>(火) | 遊び体験①<br>・ 卓上ゲーム(虹色の蛇、ハリガリ、ジェンガ、他)            |                         | 遊び体験②<br>・ 工作(牛乳パックを使ったぶんぶんゴマ、他)    |                        |
| 8/26<br>(水) | 対人援助演習②<br>・ SST 用ストーリーカードを用いたソーシャルスキル・トレーニング |                         | 対人援助演習③<br>・ 社会的情緒的学習               |                        |
| 8/27<br>(木) | 余暇活動演習①<br>・ 障害児・者の余暇活動                       |                         | 余暇活動演習②<br>・ 要保護児童の余暇活動             |                        |
| 8/28<br>(金) | 食育体験②<br>・ 実践発表                               |                         | 作業体験<br>・ オリジナルハガキ作り                |                        |

### 3. 授業評価

最終日に履修学生は、本授業の実践内容である「施設職員による講演」、「支援技術に関する演習」、「体験活動」の3分野と「授業全体」を対象とした満足度の評価及び自由記述からなるアンケートに回答した。満足度は、「満足した」、「まあまあ満足した」、「どちらともいえない」、「あまり満足できなかった」、「満足できなかった」の5件法で評価された。

#### 1) 回収率と有効回答

履修学生 69 名中 68 名が回答し、回収率は 98.6%であった。ただし、5 件法の結果と自由記述の内容に矛盾が認められた 6 名に関しては、満足と不満足を逆転させて評価した可能性があったことから、分析の対象から外し、62 名の回答を分析対象とした。

#### 2) 満足度の評価結果

「満足した」を 5 点、「まあまあ満足した」を 4 点、「どちらともいえない」を 3 点、「あまり満足できなかった」を 2 点、「満足できなかった」を 1 点として、学生個々人の評価を得点化したうえで、実践内容の 3 分野及び授業全体の満足度の平均得点を算出した（図 2）。いずれの満足度の平均得点も 4 点前後であり、履修学生は本授業から比較的高い満足を得たことが分かる。

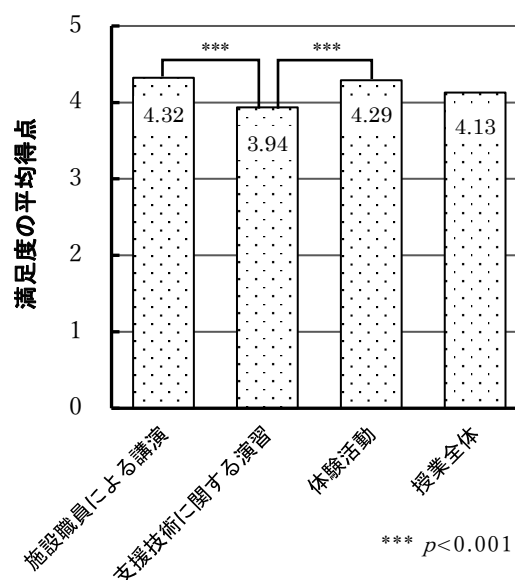


図 2 実践内容及び授業全体の満足度

実践内容の 3 分野及び授業全体の満足度の差を確認するために分散分析を行った結果、有意差を認めた ( $F(3,183)=7.42, p<0.001$ )。そこで、Bonferroni 法による多重比較を行った結果、「施設職員による講演」の満足度が「支援技術に関する演習」の満足度よりも有意に高く ( $p<0.001$ )、「体験活動」の満足度も「支援技術に関する演習」の満足度よりも有意に高かった ( $p<0.001$ )。

#### 3) 自由記述

自由記述の記載内容を確認すると、「とても濃い 10 日間だった。様々な体験や学びを通して自分自身を成長できた」といった回答に代表されるように、充実した 10 日間であったこと、多様な体験ができたことへの評価が複数認められた。その一方で、「実りのある実習であったと思うが、やはり実際に施設

に行きたかったという気持ちが強い」といった、実際の実習に行けなかったことを残念に思う回答も複数認められた。また、少数ではあるが、教員側の段取りの不備やレポートなどの負担の高さ、新型コロナウイルス感染症への感染の不安などを指摘する回答も認められた。

#### 4. 考察

以上、本学で行った施設実習に代わる学内演習等の試みについて報告した。初めての試みであり、この授業が施設実習の代替として機能するのか、教員も履修学生も不安を抱えながらの実践であった。結果的には、履修学生は本授業に対して比較的高い満足を感じており、施設実習の代替として、一応の機能を果たしたと判断できる。ただし、「支援技術に関する演習」に対する満足度が「施設職員による講演」や「体験活動」の満足度に比較して有意に低く、「支援技術に関する演習」の改善が必要である。「支援技術に関する演習」で満足度が低くなった原因としては、履修学生が、演習で学んだ内容を実際の実習場面において利用者とのやりとりで実践できるかどうかや、学んだ内容が本当に有効であるかどうかについて、十分な確信を持てなかったことが考えられる。実際、自由記述においては、1名からのみであったが「子育て支援プログラムの内容は勉強になったが、実際に生かせるかどうかは難しいと感じた」との回答もあった。

また、満足度においては、「施設職員による講演」が最も高く、現場の職員による体験を交えた知見が、履修学生の興味関心を強く引き付けたことが分かる。よって、「支援技術に関する演習」の満足度を上げるには、「施設職員による講演」の内容と「支援技術に関する演習」で学ぶ内容を結びつける工夫を行うことにより、この演習で学ぶ支援技術の有効性を履修学生に感じさせることが有効と考える。

新型コロナウイルス感染症については、ワクチン接種が開始されたものの、現在の感染状況は楽観視できる状態ではない。リスクやそれに伴う強い不安が払拭されることがなければ、令和3年度も施設実習に代わる学内演習等を実施する必要性に迫られることは十分に考えられる。よって、本年度の実践の振り返りと反省から本授業の改良、改善を行うことが必要である。しかし、どのような工夫を行っても学内演習等では実際の実習の代替にならない部分があることも確かである。例えば、学内演習等では、実際に施設を利用する児童や障害者らをケアしたり、施設の環境整備を行ったりすることはできない。よって、実習施設と十分な協議を重ね、十分な新型コロナウイルス感染症対策をとったうえで、施設実習を行うことの検討も欠かせない。

### 【参考・引用文献】

藤原映久(2007)対人トラブルの多い児童のための SST 用ストーリーカード.

日本 LD 学会 (編), LD, ADHD, 高機能自閉症等の子どものための指導教材集. 明治図書, 34-40.

井部文哉 (編) (2006) キレないこどもを育てるセカンドステップ. NPO 法人日本子どものための委員会.

かざまりんぺい, えびなみつる (2004) 手が脳を鍛える 作って遊べ!. 誠文堂新光社.

厚生労働省 (2019) 指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について.

厚生労働省 (2020) 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う指定保育士養成施設の対応について.

梅田真理, 緒方明子, 恵良美津子, 他 (2016) LD・ADHD 等心理的疑似体験プログラム第 3 版. 日本 LD 学会 特別支援教育士資格認定協会.

野口啓示 (2015) むずかしい子を育てる コモンセンス・ペアレンティング・トレーニングマニュアル. 明石書店.

鯖戸善弘 (2016) コミュニケーションと人間関係づくりのためのグループ体験学習ワーク. 金子書房.